

## 12年目の3・11に寄せて（事務局長談話）

東日本大震災で被災し、お亡くなりになられた方々への追悼の意を申し上げます。また、この震災によって家族、友人、同僚など、かけがえのない方々を失われたみなさま。今も行方不明となっているみなさま。そして、ふるさとを喪い、コミュニティーがズタズタに破壊され、今も避難を続け、帰れない方々への心からのお見舞いを申し上げます。

福島原発事故から12年という月日が経ちました。どうしたらよいのかと途方にくれるばかりの瓦礫で覆いつくされ、放射能が降り注いだ絶望の日々からは想像もつかないぐらい、太平洋沿岸部の光景は一変しました。はじめて訪れる方にとっては、「戦場」と称された光景どころか、きれいに整備された駅舎や鉄路、街並みばかりで、そこに痕跡を探すことは難しくなりつつあります。

表面上＝見た目の「復興」は遅々として進んできました。しかし、放射線防護についての社会的合意は形成されない12年でした。同じ地域に住んでいても、事故前より高い放射線量を容認されている方々もいれば、子どもたちを不要な放射線被ばくから遠ざけるために避難を続けている方々。あるいは、とどまらざるをえない事情があるものの、被ばくを避けるための精一杯の努力を続けている方々がおられます。いのちや健康に関わる大切な事項のひとつであっても、まるでモザイクタイルのように棲み分けが分化してきました。

原発事故直後、原発作業員ですらめったにないという20ミリシーベルト／年という追加の被ばく線量を国が基準として設定、固定化したために、「復興」が至上命題とされる被災地において、汚染されたふるさとや放射線被ばくについての相異にひかりがあてられることはほぼなく、むしろ、避けられてきました。

一方、それを伏せた上での「復興」の進捗に関する情報は洪水のように流されてきました。まるで津波のように押し寄せる情報渦の中、養育者は自分を奮い立たせ、必死に子どもたちや大切ないのちを護るための営みが続けられた12年でもありました。

「絆」「誰一人として取り残さない」という美辞麗句が語られるものの、「今も

避難しているのか」「いつまで心配しているのか」「いつまでこだわっているのか」などと、原子力（核）災害の性状や被害実態が理解されず、心ない視線や言動に晒されるなど、時間がどれだけ経とうとも、被災住民や当事者の心のありどころは決して安息の場を見出すことが難しい12年目のこの日を迎えています。環境省や福島県知事等による「多くの子どもたちが甲状腺がんに苦しんでいる…」バッシング（※参照）も記憶にあたらしいところです。

ある日突然住み慣れたふるさとやコミュニティーを奪われ、引き裂かれたこと。それまでとそれ以降の断絶、体調異変という、これらの実体験とあわせて、東日本壊滅という最悪シナリオすら想定されたほどのカタストロフィーを「日常」的な規範に押し込めようとする社会的慣性や揺れ戻しの中に置かれた当事者の不安や孤立感、痛苦は計り知れず、それを理解しようとする努力は十分になされているでしょうか。逆に忘れられようとしていないでしょうか。

今も原子力緊急事態宣言は解除されておらず、事故原発の懸命な収束作業がいまなお24時間休みなく続けられる一方、炉心溶融した核燃料に接触した大量の放射能汚染水についての取扱いをめぐって、海洋放出を目指す国や東京電力が強引に計画を進めようとしており人為的な放射能汚染拡大について喫緊の課題となっています。

原子力、放射能（核）災害は一人や限られた人々だけでどうにかなるような性質、規模の災害ではありません。自然災害とは全く異なります。放射能汚染から目を逸らさず、事故前よりなお高い追加被ばくに晒されている住民へのサポート、健康影響の被害最小化に寄与する取組みを「いずみ」はこれからも行って参ります。国内外からの多大なみなさまのご支援、お祈りを心より感謝申し上げます。引き続きご支援、お祈りくださいますようどうかよろしく願いいたします。

※詳細はサイト内をどうぞご参照ください。 <http://tohoku.uccj.jp/izumi/?p=16004>

2023年 3月11日

東北教区放射能問題支援対策室いずみ 事務局長 服部 賢治